

プロジェクトG

ー地域と映画のつながりを考えカタチにするプロジェクトー

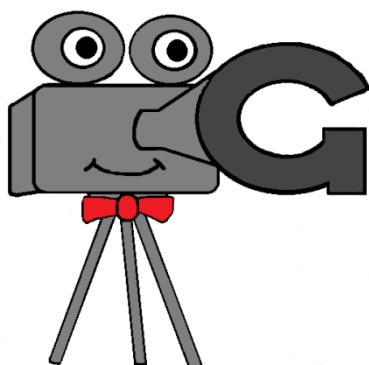
代表者 古垣寿子（経済B 3年）
構成員 檜垣里穂（経済B 3年）堀川順子（経済B 3年）吉田慧美（経済B 3年）
金重暁子（経済B 3年）山本百合香（人文B 2年）
池田康恵（人文B 3年）弘中眞子（経済B 1年）
晋川卓也（経済B 2年）福原輝久（人文B 3年）
石津瑛理佳（経済B 3年）

1. プロジェクト概要

プロジェクトGでは、学生や地域住民に山口と映画の素晴らしさを多く知ってもらうために、実際に自分たちで山口でのロケ地を決め、短編映画を撮影した。また、6月30日には山口県下関市出身の佐々部清映画監督の講演を行った。地元映画がその作品と土地に与える影響を監督の豊かな経験から学び、山口の良さを私たちが発信していくことを当プロジェクトの目標としている。

2. 短編映画撮影「足湯物語」

短編映画を制作するにあたり、大学生に身近である湯田温泉をロケ地として使用することにした。そのなかでも山口市の名物である「足湯」と古くから伝わる「白狐伝説」を掛け合わせてできたのが、この「足湯物語」である。シナリオは今年2月から古垣、檜垣が推敲を重ね、4月に完成した。監督は古垣、役者は同じく古垣、山本、福原の3名である。撮影は温泉舎、湯田温泉駅で行った。クランクインは5月20日、クランクアップは5月27日で撮影日は全部で3日間であった。たった3日間ではあったが、正午に集まり、その後辺りが真っ暗になるまで撮影を行い、とても中身の濃い時間になった。撮影の際最も困ったことは、撮影中に周りの環境が変わってしまうことである。時間が経つにつれて日が暮れてしまい、同じシーンでも画面の明るさが変わってしまうこと、周りの人や物などが動いてしまうなどである。その他、映画製作が初めてのメンバーが多い、メンバーの日程が合わないなどさまざまな困難もあったが、メンバーの協力により無事に撮影を終了することができた。その後は、映画の編集作業を行った。編集作業は撮影とは違い、屋内ではあったが長時間パソコンの画面を見続けることや、画面や音の調整など細かい作業を続けるため、撮影よりも大変な部分もあった。連日、古垣宅で深夜まで作業を続け講演会前日の29日に「足湯物語」は完成した。



イメージキャラクター：ジージ



「足湯物語」撮影時

3. 講演会

2012年6月30日13時～17時に日本アカデミー賞を受賞された佐々部清監督をお招きし、講演会を開催した。講演会は「チルソクの夏」の上映、監督とのディスカッション、そして「足湯物語」の初上映の場でもあった。

講演会の準備は2011年11月より始め、11月27日に周南で行われた周南映画祭で佐々部監督に直接会い、プロジェクトの内容及び熱意を伝えた。その後、監督の所属する株式会社シネムーブの臼井プロデューサーと連絡を重ね、講演会への出演を了承していただいた。また、「チルソクの夏」上映のために、株式会社ブレノンアッシュとも交渉し、上映権をお借りした。講演会に向け、ポスター、チラシを制作し、山口市の公共施設や大学で掲示した。周囲の協力を得、授業内告知や学生ボランティアの募集、マスメディアでの宣伝も行った。中国新聞、ほっぷ、サンデー山口、KRY ラジオなど数多くで紹介をしていただいた。学長にもプロジェクトの主旨、講演会の内容を伝え応援のお言葉をいただき、さらに学長と総務副学長のご厚意により、大学正門前に看板を立てさせていただいた。こうした広報と同時に、役割を徹底しリハーサルを繰り返し行った。照明の加減や立ち位置、ステージ上の机の角度など細かいところまで、何度も確認した。講演会の1週間前は講演会準備や広報、上述の映画編集によりほとんど眠れなかった。当日、大学会館大ホールにて「佐々部清氏の映画上映と講演会〜地域と映画の係わりとは〜」を開催した。総務副学長の開演の挨拶から始まり、前半は映画「チルソクの夏」の上映を、後半は佐々部監督の講演会という2部構成で行った。後半の佐々部監督の講演会ではフリーライターの大橋広宣氏にもお越しいたいただき、古垣も交えてのディスカッションを行った。「チルソクの夏」の撮影秘話や監督の故郷・下関に対する想いなど監督の生の声をお聞きすることができた。講演の最後にはプロジェクトGの自主制作短編映画「足湯物語」の上映と、監督の母校のプロモーションムービーも交えて、批評をしていただいた。準備の甲斐もあり、当日は大きなトラブルもなく、62名の観客を迎え、順調に講演会を終えた。講演会後の懇親会では、講演会以上に監督の近くで話を聞くことができ、より監督の映画に対する想いを知ることができた。

4. 講演会観客の声

講演会当日実施したアンケートでは「監督のお話が聞けて良かった」という声が一番多く、「今後頑張してほしい」という応援もいただいた。一方「段取りが悪い」、「映画が暗くて見づらかった」、「映画の主旨が分からなかった」、「質問時間がもっと欲しかった」という指摘もあったが、準備不足や聞き手視点に立てなかったなどの反省点が分かり、非常に勉強になった。山口、宇部、萩、下関など山口県内だけでなく、東京や鹿児島など遠いところから来て下さった方もいらっしゃった。



講演会風景その1



講演会風景その2



講演会ポスター

5. 短編映画撮影「姫山伝説」

6月の講演会で佐々部監督からいただいた助言やアンケートを参考にしながら自主制作短編映画の第2弾として「姫山伝説」を制作した。

山口市の姫山に伝わる「姫山伝説」をモチーフに制作した短編映画は、8月の初めにどのような作品にするか話し合いを行い、ストーリー案をメンバー間で募集し、投票するという形式で決定した。脚本、絵コンテを弘中、そして監督を弘中、古垣の2人が務めた。役者は吉田、堀川、晋川、山本、そして外部から応援の上西園氏と綾部氏の計6名が務めた。撮影は9月から11月末までにわたり行った。夏季休業期間から後期授業の中での撮影で授業などの合間での撮影が続く、当初の予定より遅れてしまったが焦って撮影を終わらせるのではなく、納得の

いく映像が撮れるまで皆で粘り強く撮影を行った。中でも大変だったのは、「足湯物語」と同じく、天気や日の長さの変化により、画の明るさも変化してしまうことであった。佐々部監督の助言を参考に、映画を観る側の視点を忘れずに撮影を行った。撮影終了後は12月20日～23日の上映会に間に合うように編集を行い、12月19日には完成作品の試写を実施した。



「姫山伝説」編集時

6. 映画上映会

2012年12月20日～23日の4日間、道場門前商店街のオアシスどうもん一階地域交流サロンにて「プロジェクトG 映画上映会」を開催した、4日間合計で36名の方にお越しいただいた。期間中の12月22日、23日は株式会社街づくり山口の御協力により、山口市中心商店街のイベント「X'mas STREET」姫山シンデレラのスピノフとして参加した。

6月の講演会とは違い、開催場所が学外であったため、商店街の振興組合の許可を得てポスターを商店街の柱に掲示し、商店街のイベント時にチラシを配った。また、12月16日の読売新聞「わがまちホームページ」（山口版）にて活動やイベントを紹介していただいた。上映会を行うにあたり、スクリーンやプロジェクター、マイクなどの物品が必要であったため、山口市市民活動支援センター「さぼらんて」から支援を受けた。

今回の上映会は、夏季休業から制作を進めていた自主制作短編映画の第2弾である「姫山伝説」と6月の講演会にて上映した「足湯物語」の2本の上映を行った。上映会中、来場者から直接映画の感想を伺ったほか、技術面でのご指導などをしていただき、市民の方と交流を行うことができた。短編映画制作から上映会準備まで、メンバーが一丸となって準備を進め「足湯物語」だけでなく第2作目の「姫山伝説」も広く発信することができた。

7. 上映会来場者の声

上映会期間中実施したアンケートでは「改めて姫山伝説を知ることができた」、「姫山伝説を現代とアレンジしているところがおもしろかった」など姫山伝説をご存知の方が殆どであった。また、「もっとこうすれば良くなる」などの映画制作の技術的な助言も多く頂けた。思い思いの感想をお書き頂き、参考になる意見ばかりであった。



映画上映会その1



映画上映会その2



映画上映会ポスター

8. プロジェクトを通しての感想

このプロジェクトは2011年の秋から準備を始めて今に至る。初めは講演会など実現できないのではないかと不安に感じることもあったが、共に企画立案し活動してきた仲間の力や「おもしろプロジェクト」の支援により実現することができた。また、ひとりでは決して実現できないことをこのプロジェクトを通して経験できた。プロジェクトのメンバーと多くの支えてくださった方々に感謝の気持ちでいっぱいである。映画を通して山口の魅力が少しでも伝わっていれば嬉しい。(経済学部3年古垣寿子)

「おもしろプロジェクト」を通し、普通では実現の難しい講演会の開催、地域と連携した映画作りや上映に関わることができた。企画を通して学んだことは、大学内外の連携の難しさである。特に、佐々部監督の所属される株式会社シネムーブ、「チルソクの夏」の上映権を借りた株式会社プレノンアッシュなど、メールで連絡を取ることが多く、意思疎通が上手くいかなかったことや、スケジュールの調整などの問題があった。しかし、細かな連絡や周囲からの助言もあり、無事に講演会を迎えることができた。企画した当時は2人だけのプロジェクトであり、講演会や短編映画どちらも2人だけでは成功させることができなかった。協力してくれた全ての人に感謝したい。私達の今回のプロジェクトを通して、学生が山口の魅力を知る、地域の人が魅力を再認識するきっかけになったと感じている。(経済学部3年檜垣里穂)